

若者との交流による地域高齢者の自己の役割認識と 社会貢献意識の活性化に関する研究

若者との交流による地域高齢者の自己の役割認識と 社会貢献意識の活性化に関する研究

平成 23 年度 山梨県立大学地域研究交流センター地域研究事業助成報告書

平成 24 年 3 月

研究代表者: 渡邊 裕子 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
研究分担者: 流石ゆり子 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
森田 祐代 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
小山 尚美 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
萩原理恵子 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
水口 哲 (山梨県中北教育事務所 地域教育支援)
依田 良文 (山梨県中北教育事務所 地域教育支援)
研究協力者: 保坂 求 (山梨県甲府市池田地区 長南自治会 会長)
小池 生次 (山梨県甲府市池田地区 長南自治会 副会長)
大村 重雄 (山梨県甲府市池田地区 老人クラブ 会長)

目次

I. 諸言	1
II. 研究目的	3
III. 研究方法	3
1. 研究デザイン	
2. 調査対象	
3. 調査時期	
4. 調査方法	
5. 調査内容	
6. 分析方法	
7. 交流事業の実施場所および実施時期	
IV. 研究における倫理的配慮	5
1. 対象となる人の人権の擁護	
2. 対象となる人の理解を求め,同意を得る方法	
3. その他倫理的問題に対する配慮	
V. 予測される学問的・社会的な貢献	6
VI. 結果	7
1. 対象の基本属性	
2. 活動への期待度・満足度および社会貢献に対する意識	
3. 地域高齢者の生きがい感	
4. 地域高齢者の若者イメージ	
5. 交流事業後,若者(看護学生)に対して感じたこと	
6. 交流事業に対する意見・質問	
VII. まとめ	22
謝辞	22
引用文献・参考文献	23
付録・資料	25
1. 研究協力依頼文書	
2. 研究協力同意書	
3. 研究協力内容説明文書	
4. 交流前調査票	
5. 交流後調査票	
6. 交流事業当日の写真	

I. 諸言

我が国では、他国に例をみない勢いで高齢化が進んでいる。そして、この急速な高齢化は、否定的な現象として捉えられがちであるが、肯定的な傾向としてとらえると、高齢者の社会参加の機会を増やすことでもある。子ども、青年、中・高年世代の者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と自分の周りの人々や社会に役立つような地域づくりを実践する活動である「世代間交流」の必要性が叫ばれている¹⁾。高齢者と他世代間の交流は全国各地で様々な取り組みがされている。中でも若者との交流については、主に児童から高校生までを対象とした多くの介入研究がなされ、高齢者、若者双方に対する効果が確認されている^{2)~8)}。また、看護学生を対象とした「高齢者イメージ」に関連した研究は多くあり、我々も臨地実習や同居祖父母との交流による「高齢者イメージ」を検証してきた^{9)~14)}。しかし、異世代間交流、特に看護学生との交流が高齢者の「若者像」に及ぼす影響や高齢者の「若者像」の変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証したものはほとんどない。我々（老年看護学領域）は、中北教育事務所との協働により、平成 18 年度より K 学院高齢者（地域リーダー高齢者）と若者（看護学生）との『異世代間交流事業』を実施してきた。本事業が定着した平成 21 年度には研究的取り組みを開始し、Y 県における『若者との交流』事業前後で、高齢者の活動への満足度・心理・若者像の変化を検証し¹⁵⁾、平成 22 年度には、高齢者に「高齢患者役」として専門職をめざす学生の教育の一部に関わる中での交流プログラムに改変した。参加した高齢者は「看護学生に先輩としての知恵を伝授する」という意識で交流プログラムに臨み、事業参加前後で「若者像」が大きく変化した¹⁶⁾。平成 22 年度までの研究対象は、上述の地域のリーダー的存在の高齢者であったが、研究対象を K 学院高齢者（地域リーダー高齢者）から、さらに地域在住の一般高齢者にまで広げることが課題となっていた。

Y 大学 I キャンパス周辺地区は、本学看護学部の前身である高等看護学院保健学科の地区実習フィールドとして 20 年以上にも及ぶ歴史がある。そのため、地域住民は大学との協働活動や大学の地域貢献活動を強く求めている。そこで今年度は、大学周辺地域の A 自治会在住高齢者を対象に若者（看護学生）との交流事業を実施したいと考えた。大学周辺地域の A 自治会高齢者との交流プログラムであれば、高齢者が参加しやすいのみならず、この事業をきっかけに地域の中で看護学生と高齢者の継続した交流が持て、若者（看護学生）に対する高齢者の役割認識および社会貢献に対する意識の活性化に繋がるのではないかと考えた。

既述のように、我々の企画する「若者と高齢者の交流」に関する事業は平成 18 年度より開始し、本年度で 6 年目を迎えた。交流する高齢者および看護学生共に、双方に抱くイメージがプラスに変化するのみならず、交流による満足度は高く、あらためて本事業の意義を実感している。本学には、周辺自治会から学生が地域の活動に積極的に参加することを求められているが、看護学生が真摯に話しを聴く姿勢に触れ、若者が高齢者からの知恵の伝授を求めていることを実感できることで、地域在住高齢者が若者に感じている距離感が

少なくなり、高齢者側から自発的、積極的な世代間の交流を求める姿勢が生まれてくることが期待できる。特に、高齢者が生活する地域にある看護学生との交流であることから、交流をきっかけに地域で催される行事に学生が積極的に参加することを促進することで、生活圏内で高齢者と看護学生双方が出会い、継続して交流を深めることが期待できる。

一方、医療現場では高齢者を対象とする場面がますます多くなっており、高齢患者やその家族のニーズに応じた看護提供が求められている。しかし、高齢者との接触体験が少ない看護学生にとって、高齢者の理解や高齢者との対応に困難を要する場合もある。また、身体面の老化や活動性の低下などのイメージが先行し、高齢者の持っている能力に気づかないまま、養護すべき存在として捉えがちである。看護基礎教育において、学生が高齢者への関心と理解を深められるような教育を実践していくことが必要である。高齢者と直接交流する機会を持つことは、高齢者の理解を深め、ニーズに応じた適切な看護を実践できる人材の育成に寄与するものと期待できる。

【「若者(看護学生)と高齢者の交流(以下、交流事業とする)」の概要】

地域高齢者は、看護学生が授業の一環として行う演習に、ボランティアの立場から看護の対象者役（ここでは高齢患者）として参加・協力する。具体的には、学生に事前に健康に関する簡単な情報を提供（本人の意思に基づく）し、当日は学生の1グループ（学生3～4名で1グループを編成）に高齢患者役として参加し、学生の質問や測定などに協力する。学生は対象から提供された情報について看護の視点から情報の意味や他に必要な情報などについて考える演習を行う。演習時間は約2時間とし、演習終了後に高齢者と学生が自由に意見交換のできる時間（20分程度）を設け、高齢者から人生の先輩として、専門職をめざす看護学生にアドバイスをいただくことで、高齢者と学生が相互に理解を深められるような設定とする。

平成23年10月20日（木）1・2時限の「ヘルスアセスメント実践論」の学内演習（成人・高齢者を対象にしたヘルスアセスメント）に27名が参加した。

【I キャンパス周辺 A 地区の概要】

I キャンパス周辺 A 地区の高齢化率は18.6%（平成23年4月1日現在）である。K 市の高齢化率は24.7%であることから、比較的若い地域であると言える。A 地区は、地域住民が交流できる事業（運動会・文化祭・サークル活動・地域奉仕活動など）が活発に行われている。古くから住民組織の活動が活発に行われていた地区でもあり、既述のように、本学の前身である高等看護学院保健学科の実習フィールドとして多大な協力を得ており、看護学生や教員との交流を通して、地域住民が健康に対する意識を育んでいる。また、大学の事業に対する理解があり、相互の事業への協力を通じた交流を望んでいる。地域からの要請を受け、平成22年度の健康祭りには看護学生15名が参加し、血圧や体力の測定を通して地域住民と交流した。地域住民（特に高齢者）と看護学生、双方の満足感が高い交流となっており、

今後も継続して参加していく予定である。

【用語の定義】

本研究では、「地域高齢者」「若者との交流」「看護学生」を以下の定義で用いる。

➤ 「地域高齢者」

地域に在住する 60 歳以上の者。疾病の有無は問わないが、手段的日常生活動作 (instrumental activities of daily living:IADL) が自立している者。

➤ 「若者との交流」

看護学生が授業の一環として学内で行う演習にボランティアの立場から高齢患者役として参加協力する中での学生との交流であり、演習のプロセスでの両者の交流ならびに終了後の両者の個別交流をいう。(※【交流事業の概要】参照)

➤ 「看護学生」

4 年制大学の看護学部看護学科の学生。

II. 研究目的

若者との交流による地域高齢者の活動への満足度・心理状態・若者像の変化を把握し、看護専門職者を志す学生との交流が、現代の若者に対する高齢者の役割認識および社会貢献に対する意識の活性化に及ぼす効果を検証する。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

記述相関研究 (調査研究)

2. 調査対象

Y 大学 I キャンパス周辺 A 地区に在住する高齢者で、研究協力の同意が得られた 27 名。対象者の募集は、以下の手順で行った。

1) 研究協力者との打ち合わせ

平成 23 年 6 月、A 地区 B 自治会会長、副会長、老人クラブ会長に対して、本研究の趣旨と個人情報の守秘について口頭で十分な説明を行い、研究協力者となる同意を得て、本研究の実施に向けた詳細な打ち合わせを行った。

2) 研究協力者募集

平成 23 年 8 月、B 自治会の組長 (23 名) を通して本研究の趣旨と個人情報の守秘について記した文書(資料1)を B 自治会全世帯 (約 290 世帯) に配付し、研究対象となる高齢者を募り文書による同意を得た(資料2)。

3) 応募者説明会

平成 23 年 9 月 30 日に、応募者に対して説明会を開催し、共同研究者が研究の趣旨およ

び方法について記載した文書(資料 3)を用いてあらためて口頭で詳細な説明を行い、質問を受ける機会を設けた。また、当日出席できない応募者に対しては、研究者が個別に訪問し、説明会と同様に詳細な説明を行った。

3. 調査時期

交流事業前—平成 23 年 9 月 30 日（金）～10 月 7 日（金）の 1 週間

交流事業後—平成 23 年 10 月 20 日（木）

4. 調査方法

自記式質問紙によるアンケート調査（交流事業前・後）

1) 交流事業前調査

同意が得られた高齢者（以下 調査対象者）に対し、平成 23 年 9 月 30 日（金）の説明時に一斉配付し、その場で回収した。説明会に出席できない調査対象者には、個別訪問時に配付し、郵送により回収した（本人の承諾がある場合はその場で回収）。

2) 交流事業後調査

平成 23 年 10 月 20 日(木)の交流事業終了直後に調査票を一斉配付しその場で回収した。

5. 調査内容(資料 4・資料 5)

1) 基本属性（交流前のみ）

年齢、性、家族構成、若者と話す機会および頻度

2) 活動への満足度および社会貢献に対する意識

交流事業前：本交流事業への参加動機 1 項目、本交流事業への期待 2 項目、社会貢献に対する意識 8 項目

交流事業後：交流事業後の満足度 3 項目、社会貢献に対する意識 8 項目

3) 心理（交流事業前・後）

近藤・鎌田の「生きがい感スケール¹⁷⁾」を用いて、その中から重複した内容を除き、選択肢を 5 段階とした 16 項目

4) 若者像（交流事業前・後）

甲斐らの「若者像尺度¹⁸⁾」参考にした若者像 8 項目

5) 感想・要望・質問（交流事業前・後）—自由記載

6) 看護学生に対して感じたこと（交流事業後のみ）—自由記載

6. 分析方法

- 1) 基本属性の群間差および各調査内容の前後の変化について、 χ^2 検定と対応のない t 検定、Wilcoxon 検定、また若者像は Mann-Whitney 検定により比較する。全ての解析には、SPSS16.0J for Windows を用いた。

- 2) 調査票の自由記載については、内容分析法を参考に質的検討を行った。

7. 交流事業の実施場所および実施時期

- 1) 場所:Y 大学 I キャンパス 実習室
2) 時期:平成 23 年 10 月 20 日 (木) 1・2 時限

IV. 研究における倫理的配慮

1. 対象となる人の人権の擁護

「ヘルシンキ宣言」および「看護師の倫理規定（日本看護協会）」等に従って以下の点を遵守する。

- ・ 人々の知る権利および自己決定の権利を尊重し、その権利を擁護する。
- ・ 守秘義務を遵守し、個人情報の保護に努めるとともに、これを他者と共有する場合は適切な判断のもとに行う。

2. 対象となる人の理解を求め、同意を得る方法

前述のとおり、平成 23 年 8 月、B 自治会の組長を通し、本研究の趣旨と個人情報の守秘について記した文書(資料1)を B 自治会全世帯に配付し、研究対象となる高齢者を募った。平成 23 年 9 月 30 日、研究協力に同意が得られた調査対象者に対して別途説明会を開催し、本研究の目的および調査内容と調査方法について記載した文書(資料3)を用いて、共同研究者が十分な説明を行い、質問できる機会を設けた。また、当日出席できない応募者に対しては、研究者が個別に訪問し、説明会と同様に詳細な説明を行った。

調査対象者の自由意思を尊重して、対象者の本研究への参加は強制ではないこと、研究途上であっても同意はいつでも撤回できること、本研究への協力を拒否しても不利益は一切生じないこと、前後比較のため調査票には番号をつけ交流事業前後で同一番号の調査票に記入してもらうが、本研究で取得されたデータは研究目的を踏まえ匿名性を確保した分析と公表、研究終了後の確実な破棄について十分な説明を行う旨を伝えた。

なお、研究協力者が自治会役員であるため、対象となる人に強制力が働く可能性があるため、依頼を断れない状況を生み出さないように、上記の趣旨および注意事項等の説明と同意の確認は、本交流の企画・運営に直接関係しない共同研究者が行った。また、同意書(資料2)の回収にあたっては、個人情報を守秘するため、調査対象者本人に厳封を依頼するとともに、研究協力者にも慎重な取り扱いを依頼した。

また、本研究は授業の場が研究フィールドとなるため、授業概要を説明する際、本研究の趣旨と交流する高齢者に対して前後に調査行うが、学生の成績評価等には一切影響しないことを話し、研究への理解と協力を依頼した。

3. その他倫理的問題に対する配慮

- 1) 研究協力者に対する質問や相談の窓口を設け、研究協力者の募集から調査終了後まで、いつでも対応できる体制で実施した。
- 2) 既述のように、本交流事業は、地域高齢者には看護学生が授業の一環として行う演習に高齢患者役として参加・協力を求めた。授業への協力に関する説明および演習中の対応等については、本研究目的とは異なるので詳細はここでは割愛するが、個々の高齢者への十分な説明と救急時の対応については、別途万全の体制を整えて実施した。

本研究は、Y 大学看護学部研究倫理審査委員会の倫理審査にて『承認』を得て実施した。

V. 予測される学問的・社会的な貢献

Y 県は高齢化率が 24.1%（平成 22 年 4 月 1 日現在）と超高齢社会を迎えた地域にあり、多世代が共存・協力してコミュニティを形成していくという緊急課題を抱えている。既述のように、「異世代間交流」の必要性が叫ばれ、各地で様々な取り組みが開始されている。高齢者と若者との交流については、主に児童から高校生までを対象とした多くの介入研究がなされ、高齢者、若者双方に対する効果が確認されているが、大学生以上の若者との交流を企画したものは極めて少なく、また大学で行われている授業に高齢者が出向いて協力するという企画はない。

本研究は、過去 5 年間の成果を踏まえ、大学周辺の地域で生活する高齢者が、大学で学ぶ学生の授業に協力する形で参加することを通して、「若者に知恵を伝授する」という役割認識を持つと共に、地域の中で高齢者が持つ力を発揮して社会の中で貢献する意識や態度の活性化を目指す。特に看護学生が真摯に話を聴く姿勢に触れることで、地域在住高齢者が若者に感じている距離感が少なくなる。特に、Y 大学周辺地域は、地域住民が交流できる事業（運動会・文化祭・サークル活動・地域奉仕活動など）が活発であり、大学の前身である高等看護学院保健学科では、実習フィールドとして多大な協力を得ており、看護学生との交流を通して、健康に対する意識を育んでいる。大学の事業に対する理解があり、相互の事業への協力を通じた交流を望んでいる。本企画は、高齢者が生活する地域にある本学の看護学生との交流であるため、本交流事業を通して高齢者と若者である看護学生との距離感が少なくなり、生活圏内で高齢者と看護学生双方が出会ったとき、継続して交流を深めることが期待できる。

VI. 結果

1. 対象の基本属性

1) 基本属性

対象者 27 名全員から回答が得られた (回収率: 100%) . 対象者の平均年齢±標準偏差は, 72.1±2.1 歳で, 範囲は 63 歳から 86 歳であった. 各年齢別の構成は 60~64 歳が 3 名 (11.1%), 65~69 歳が 6 名 (22.2%), 70~74 歳が 8 名 (29.6%), 75~79 歳が 6 名 (22.2%), 80 歳以上が 4 名 (14.8%) であった. 対象者の性別は, 男性 14 名 (51.9%), 女性 13 名 (48.1%) であった (表 1) .

表1 対象者の基本属性

n=27			
		人数	割合
年齢	60~64歳	3	11.1%
	65~69歳	6	22.2%
	70~74歳	8	29.6%
	75~79歳	6	22.2%
	80歳以上	4	14.8%
性別	男性	14	51.9%
	女性	13	48.1%

2) 同居家族

同居家族については複数回答で聞いたところ, 配偶者がいる者が 23 名 (85.2%) であり, 息子が 11 名 (40.7%), 娘, 孫がそれぞれ 6 名 (22.2%), 嫁が 3 名 (11.1%), 母, 婿がそれぞれ 2 名 (7.4%), 義母が 1 名 (3.7%) であった (表 2) . なお独居は 2 名 (7.4%) であった.

表2 対象者の同居家族
複数回答

人数 割合		
配偶者	23	85.2%
息子	11	40.7%
娘	6	22.2%
孫	6	22.2%
嫁	3	11.1%
母	2	7.4%
婿	2	7.4%
義母	1	3.7%

3) 若者と話す機会と頻度と内訳

若者と話す機会は「ある」が 8 名 (29.6%), 「時々ある」が 10 名 (37.0%) であり, 「ほとんどない」は 9 名 (33.3%) であった (表 3) .

表3 若者と話す機会

n=27		
		人数 割合
ある	8	29.6%
時々ある	10	37.0%
ほとんどない	9	33.3%

このうち, 「ある」「時々ある」と回答した 18 名に, 誰と話すのかを質問したところ, 「別居の孫」が 6 名 (33.3%), 「近所の若者」が 4 名 (22.2%), 「同居の孫」が 3 名 (16.7%) であり, 「その他」が 5 名 (27.8%) であった. 「その他」には自治会活動, 甥の子, 友人の子供などとあった.

表4 若者と話す機会の内訳

n=18			
		人数	割合
誰と	別居の孫	6	33.3%
	近所の若者	4	22.2%
	同居の孫	3	16.7%
	その他	5	27.8%
頻度	週1回程度	7	38.9%
	月1回程度	6	33.3%
	毎日	4	22.2%
	その他	1	5.6%
時間	30分以内	9	50.0%
	挨拶程度	6	33.3%
	60分以内	2	11.1%
	その他	1	5.6%

また, 話す頻度について質問したところ「週 1 回程度」が 7 名 (38.9%), 「月 1 回程度」が 6 名 (33.3%), 「毎日」が 4 名 (22.2%), 「その他」が 1 名 (5.6%) であった. 「その他」には, 年 2 回などがあった.

さらに話をする時間について質問したところ, 「30 分以内」が 9 名 (50.0%), 「挨拶程度」6 名 (33.3%), 「60 分以内」が 2 名 (11.1%), 「その他」が 1 名 (5.6%) であった (表 4) .

4) 「若者との交流事業(以下, 交流事業)」への参加動機

交流事業の参加動機について複数回答で質問したところ, 「看護学生の学びに興味があったから」「若者と話す機会が少ないから」がともに12名(44.4%)で最も多く, 次いで「若者と話すことが好きだから」が6名(22.2%), 『看護学生との交流』参加経験者の話を聞いて面白そうだから」が5名(18.5%), 「若者に年長者としての知恵を伝授したいから」が4名(14.8%), 「その他」が7名(25.9%)であった(表5)。「その他」には「自治会, 老人会で勧められたから」

「看護学生が日頃学んでおられることを知りたいと思ったから」「近所の人との誘い」などがあつた。

表5 参加動機

	複数回答	
	人数	割合
看護学生の学びに興味があったから	12	44.4%
若者と話す機会が少ないから	12	44.4%
若者と話すことが好きだから	6	22.2%
「看護学生との交流」参加経験者の話を聞いて面白そうだから	5	18.5%
若者に年長者としての知恵を伝授したいから	4	14.8%
その他	7	25.9%

2. 活動への期待度・満足度および社会貢献に対する意識

1) 交流事業前の期待度とその内容

交流事業への期待度を質問したところ, 「とても期待している」が7名(25.9%), 「期待している」が18名(66.7%), 「あまり期待していない」が1名(3.7%)であり, 「まったく期待していない」はいなかった(表6)。

期待する内容を複数回答で質問したところ, 「現代の看護学生を理解したい」が19名(70.4%), 「看護学生

表6 交流事業に対する期待度

	n=27	
	人数	割合
とても期待している	7	25.9%
期待している	18	66.7%
あまり期待していない	1	3.7%
まったく期待していない	0	0.0%
無回答	1	3.7%

の話をたくさん聞きたい」が16名(59.3%), 「看護学生に自分たちの世代を理解してほしい」が13名(48.1%), 「看護学生の学びをサポート(手助け)したい」が7名(25.9%), 「自分が看護学生にたくさん話をしたい」が3名(11.1%)であった(表7)。

表7 交流事業に期待する内容

	複数回答	
	人数	割合
現代の看護学生を理解したい	19	70.4%
看護学生の話をもたくさん聞きたい	16	59.3%
看護学生に自分たちの世代を理解してほしい	13	48.1%
看護学生の学びをサポート(手助け)したい	7	25.9%
自分が看護学生にたくさん話をしたい	3	11.1%
その他	1	3.7%

2) 交流事業後の満足度

交流事業後の満足度を質問したところ, 「期待以上の満足度であった」が17名(63.0%), 「期待していたとおりの満足度であった」が10名(37.0%)であり, 「期待していたより満足度は低かった」と「まったく満足できなかった」はいなかった。

交流した若者(看護学生)は真剣に話を聞いていたかどうかについての質問には、27 名全員が「とてもよく聞いていた」と回答していた。

さらに、自分の話が若者(看護学生)に十分理解されたと思うか質問したところ、「とてもよく理解されていたと思う」が 10 名(37.0%)、「まあまあ理解されていたと思う」が 16 名(59.3%)、「どちらともいえない」が 1 名(3.7%)であり、「あまり理解されていないかったと思う」「まったく理解されていないかったと思う」と回答した者はいなかった(表 8)。

表8 交流事業後の満足度

		n=27	
		人数	割合
事業後の満足度			
期待以上の満足度であった		17	63.0%
期待していたとおりの満足度であった		10	37.0%
期待していたより満足度は低かった		0	0.0%
まったく満足できなかった		0	0.0%
若者は真剣に話を聞いていたか			
とてもよく聞いていた		27	100.0%
まあまあよく聞いていた		0	0.0%
あまり聞いていなかった		0	0.0%
まったく聞いていなかった		0	0.0%
自分の話は若者に十分理解されていたと思うか			
とてもよく理解されていたと思う		10	37.0%
まあまあ理解されていたと思う		16	59.3%
どちらともいえない		1	3.7%
あまり理解されていないかったと思う		0	0.0%
まったく理解されていないかったと思う		0	0.0%

3) 交流事業前後の期待度・満足度の比較

交流事業への期待度を、交流事業前後で比較したところ(表 9)、有意な差が見られた(χ^2 検定:p=0.0243)。

表9 交流事業前後の期待度・満足度の比較

		n=27	
		事業前	事業後
期待している	期待していたとおりの満足度であった	7	17
あまり期待していない	期待していたより満足度は低かった	18	10
まったく期待していない	まったく満足できなかった	1	0
無回答		1	0

χ^2 検定 p=0.0243

4) 交流事業前の地域行事・活動への参加頻度

現在、地域行事への参加をどの程度しているか質問したところ、「いつも参加」が 11 名(40.7%)、「時々参加」が 9 名(33.3%)、「参加していない」が 5 名(18.5%)であった。同様に、町内会や自治会活動(以下、自治会活動)への参加については、「いつも参加」が 14 名(51.9%)、「時々参加」が 10 名(37.0%)、「参加していない」が 1 名(3.7%)であった。老人会(老人クラブ)活動(以下、老人クラブ)への参加では、「いつも参加」が 10 名(37.0%)、「時々参加」が 6 名(22.2%)、「参加していない」が 9 名(33.3%)であり、趣味の会など仲間うちの活動(以下、趣味活動)への参加では、「いつも参加」が 8 名(29.6%)、「時々参加」が 11 名(40.7%)、「参加していない」が 6 名(22.2%)であった。奉仕活動・ボランティア

活動（以下、ボランティア活動）への参加では、「いつも参加」が8名(29.6%), 「時々参加」が11名(40.7%), 「参加していない」が6名(22.2%)であった(表10)。

交流事業前と交流事業後の社会活動の設問全てに回答のあった24名について、性別(男性・女性各12名)で比較したところ(Mann-Whitney検定), 地域行事($p=0.0156$)と自治会活動($p=0.0382$)の2項目で、男性の参加割合が有意に高かった(図1)。

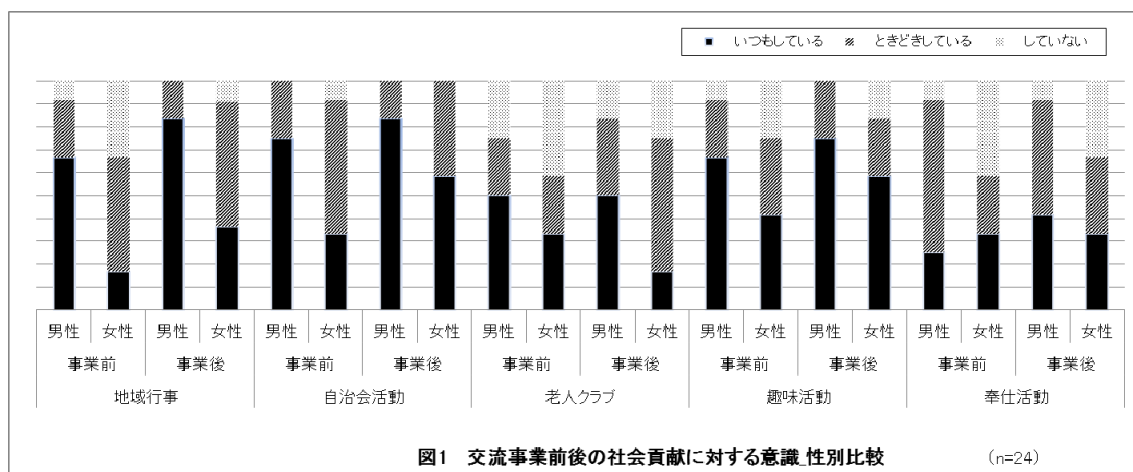
同様に24名(前期高齢者16名・後期高齢者8名)を年代で比較したところ、いずれの活動でも有意な差はみられなかった。

5) 交流事業後の地域行事・活動への参加意識

交流事業後に、地域行事への参加を今度どの程度しようと思うか質問したところ、「いつも参加」が15名(55.6%), 「時々参加」が10名(37.0%), 「参加しない」が2名(7.4%)であった。同様に、自治会活動への参加について質問したところ、「いつも参加」が20名(74.1%), 「時々参加」が7名(25.9%)であり、「参加しない」と回答した者はいなかった。老人クラブでは「いつも参加」が10名(37.0%), 「時々参加」が11名(40.7%), 「参加しない」が5名(18.5%)であった。趣味活動への参加では、「いつも参加」が19名(70.4%), 「時々参加」が6名(22.2%), 「参加していない」が2名(7.4%)であった。奉仕活動への参加では、「いつも参加」が11名(40.7%), 「時々参加」が11名(40.7%), 「参加しない」5名(18.5%)であった。

表10 交流事業前後の社会貢献に対する意識

	n=27			
	事業前		事業後	
	人数	割合	人数	割合
地域行事への参加				
いつもしている(したい)	11	40.7%	15	55.6%
時々している(したい)	9	33.3%	10	37.0%
していない(したくない)	5	18.5%	2	7.4%
無回答	2	7.4%	0	0.0%
自治会活動への参加				
いつもしている(したい)	14	51.9%	20	74.1%
時々している(したい)	10	37.0%	7	25.9%
していない(したくない)	1	3.7%	0	0.0%
無回答	2	7.4%	0	0.0%
老人クラブへの参加				
いつもしている(したい)	10	37.0%	10	37.0%
時々している(したい)	6	22.2%	11	40.7%
していない(したくない)	9	33.3%	5	18.5%
無回答	2	7.4%	1	3.7%
趣味活動への参加				
いつもしている(したい)	8	29.6%	19	70.4%
時々している(したい)	11	40.7%	6	22.2%
していない(したくない)	6	22.2%	2	7.4%
無回答	2	7.4%	0	0.0%
奉仕活動への参加				
いつもしている(したい)	8	29.6%	11	40.7%
時々している(したい)	11	40.7%	11	40.7%
していない(したくない)	6	22.2%	5	18.5%
無回答	2	7.4%	0	0.0%
小学生に自分の経験を話す				
引き受ける			11	40.7%
どちらとも言えない			13	48.1%
引き受けない			2	7.4%
無回答			1	3.7%
看護学生に自分の経験を話す				
引き受ける			15	55.6%
どちらとも言えない			10	37.0%
引き受けない			1	3.7%
無回答			1	3.7%
看護学生の血圧・脈拍測定に協力する				
引き受ける			24	88.9%
どちらとも言えない			3	11.1%
引き受けない			0	0.0%



24名の性別比較（Mann-Whitney 検定）では、地域行事への参加で男性が有意に高かったが（ $p=0.0320$ ），自治会活動への参加では有意な差はみられなかった（ $p=0.1872$ ）（図1）。

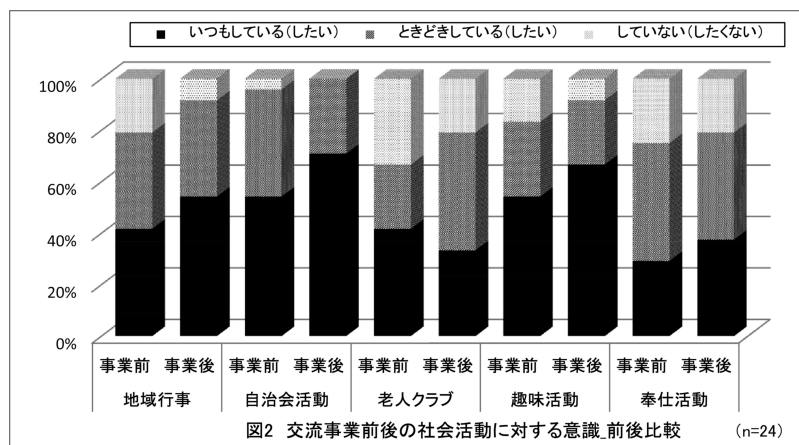
一方、年代比較では、自治会活動への参加で前期高齢者が有意に高く（ $p=0.0129$ ），地域行事への参加では有意な差はみられなかった（ $p=0.1294$ ）。

さらに、小学生に自分の体験を話すような活動依頼（以下、「小学校で話す」）が今後あった場合、引き受けるかどうか質問をしたところ「引き受ける」が11名（40.7%）、「どちらとも言えない」が13名（48.1%）、「引き受けない」が2名（7.4%）であった。同様に、看護学生に自分の経験を話す依頼（以下、「大学で話す」）については、「引き受ける」が15名（55.6%）、「どちらとも言えない」が10名（37.0%）、「引き受けない」が1名（3.7%）であり、看護学生の血圧・脈拍測定に協力する依頼（以下、「大学で測定に協力する」）については、「引き受ける」が24名（88.9%）、「どちらとも言えない」が3名（11.1%）であった（表10）。

性別・年代による有意な差はみられなかったが、「大学で測定に協力する」は「小学校で話す（ $p=0.0006$ ）」と「大学で話す（ $p=0.0081$ ）」より「引き受ける」の割合が有意に高かった（Mann-Whitney 検定）。なお、「小学校で話す」と「大学で話す」に有意な差はみられなかった（ $p=0.3430$ ）。

6) 交流事業前後の地域行事・活動への参加頻度・意識の比較

地域行事・活動への参加に対する意識を、交流事業前・後を比較したところ（ χ^2 検定），有意な差はみられなかったもの



の、全ての項目で「参加しない」の割合は減少し、老人クラブ以外の4項目で「いつも参加」の割合が増加していた（図2）。

3. 地域高齢者の生きがい感

生きがい感の信頼係数は、16項目全体で0.8369であった。下位尺度ごとに見ると、現状満足感（4項目）が0.8691、人生享楽（4項目）が0.8336、存在価値（4項目）が0.3238、意欲（4項目）が0.7176であった（表11）。

交流事業前と交流事業後の生きがい感の設問全てに回答のあったのは16名であった（有効回答率59.3%）。

表11 生きがい感スケールの信頼係数

全体	項目数	α 係数
	16	0.8369
下位尺度		
現状満足感	4	0.8691
人生享楽	4	0.8336
存在価値	4	0.3238
意欲	4	0.7176

1) 交流事業前の生きがい感

16名の交流事業前の生きがい感についてみると、合計平均値±標準偏差は58.9±7.8であり、範囲は42～69であった。下位尺度ごとに見ると、合計が最も高かったのは現状満足感66.0、次いで存在価値60.3、意欲58.0、人生享楽51.3の順であった（表12）。

平均値が高かった項目は「私は今の生活に満足感がある（4.3±0.6）」、「毎日が平和で楽しいと感じている（4.1±0.8）」、「私は今幸せを感じている（4.1±0.7）」の順であり、逆に平均値が低かったのは「私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいる（2.6±0.8）」、「世界がバラ色に輝いて見えることがある（2.7±0.5）」、「自分の人生に大きな期待を持っている（3.1±0.8）」の順であった。（表16）。

表12 事業前の生きがい感

n=16		
下位尺度	合計平均	標準偏差
現状満足感	66.0	2.2
存在価値	60.3	3.8
意欲	58.0	5.5
人生享楽	51.3	10.2

表13 交流事業前の生きがい感 性別および年代別比較

		n=16							
下位尺度	設問	性別比較				年代別比較			
		男性(n=11)		女性(n=5)		前期(n=12)		後期(n=4)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
現状満足感	私は今の生活に満足感がある	4.3	0.8	4.4	0.9	*4.5	0.8	3.8	0.5
	毎日が平和で楽しいと感じている	4.2	0.9	4.0	0.7	4.3	0.7	3.5	1.0
	私の毎日は充実している	3.9	0.7	4.2	0.8	4.1	0.8	3.8	0.5
	私は今幸せを感じている	3.9	0.7	4.4	0.9	4.1	0.8	4.0	0.8
存在価値	私は他人から信頼され頼りにされている	4.0	0.6	3.2	0.8	3.7	0.8	4.0	0.8
	私の行為で人に喜んで貰えることがよくある	3.5	0.7	3.2	0.4	3.6	0.5	3.0	0.8
	私は課せられた役割をよく果たしている	4.0	0.6	3.8	1.3	3.9	0.9	4.0	0.8
	努力した結果報われたと感じることがある	4.2	0.8	3.4	1.3	3.8	1.0	4.3	1.0
人生享楽	私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいる	2.5	1.2	2.8	1.3	2.6	1.1	2.8	1.7
	私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよく持っている	3.4	1.0	4.2	1.3	3.8	1.0	3.3	1.7
	世界がバラ色に輝いて見えることがある	2.8	0.9	2.4	0.5	2.8	0.9	2.5	0.6
	今日は一日好きなことが出来ると思う日がよくある	3.8	0.6	4.0	1.2	3.8	0.8	4.0	0.8
意欲	自分の人生に大きな期待を持っている	3.2	0.6	3.0	1.2	3.0	0.6	3.5	1.3
	私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っている	3.7	0.5	3.6	0.5	*3.8	0.4	3.3	0.5
	今や甲斐のあることをしている	3.9	0.5	3.6	0.5	3.9	0.5	3.5	0.6
	私は現在の自分の能力を精一杯発揮している	4.1	0.7	3.4	1.3	3.8	1.0	4.3	1.0

* $p \leq 0.05$ (t検定)

性別（男性 11 名，女性 5 名）および年代別（前期高齢者 12 名，後期高齢者 4 名）で比較したところ，性別では有意な差はみられなかったが，年代別では「私は今の生活に満足感がある ($p=0.0282$)」と「私は何事に対しても積極取り組んでいこうと思っている ($p=0.0482$)」の 2 項目で有意な差がみられ，いずれも前期高齢者のほうが高かった（表 13）。

2) 交流事業後の生きがい感

16 名の交流事業後の生きがい感の合計平均値±標準偏差は 60.3 ± 8.2 であり，範囲は 45～74 であった。下位尺度ごとにみると，合計が最も高かったのは現状満足感 69.8，次いで存在価値 60.3，意欲 59.3，人生享楽 51.8 の順であった（表 14）。

平均値が高かった項目は，「私は今の生活に満足感がある (4.6 ± 0.6)」，「毎日が平和で楽しいと感じている (4.3 ± 0.8)」，「私の毎日は充実している (4.3 ± 0.7)」の順であり，逆に平均値が低かったのは「私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいる (2.8 ± 0.7)」，「世界がバラ色に輝いて見えることがある (2.9 ± 0.6)」，「自分の人生に大きな期待を持っている (3.2 ± 0.5)」の順であった。（表 16）。

交流事業後の生きがい感を性別および年代別で比較した（表 15）。性別では 3 項目で有意な差が見られ，「私はフカフカの布団に寝ることをよく楽しんでいる ($p=0.0003$)」と「私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよく持っている ($p=0.0306$)」は女性が，「今や甲斐のあることをしている ($p=0.0224$)」は男性が有意に高かった。また年代別では，「自分の人生に大きな期待を持っている」で，後期高齢者のほうが有意に高かった ($p=0.0263$)。

表14 事業後の生きがい感

n=16		
下位尺度	合計平均	標準偏差
現状満足感	69.8	3.0
存在価値	60.3	2.6
意欲	59.3	6.4
人生享楽	51.8	7.6

表15 交流事業後の生きがい感 性別および年代別比較

		性別比較				年代別比較			
下位尺度	設問	男性 (n=11)		女性 (n=5)		前期 (n=12)		後期 (n=4)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
現状満足感	私は今の生活に満足感がある	4.6	0.5	4.6	0.5	4.8	0.5	4.3	0.5
	毎日が平和で楽しいと感じている	4.4	0.7	4.2	0.8	4.3	0.8	4.3	0.5
	私の毎日は充実している	4.3	0.5	4.4	0.9	4.3	0.7	4.3	0.5
	私は今幸せを感じている	4.2	0.6	4.2	0.8	4.3	0.6	4.0	0.8
存在価値	私は他人から信頼され頼りにされている	3.7	0.5	3.4	0.5	3.7	0.5	3.5	0.6
	私の行為で人に喜んで貰えることがよくある	3.6	0.5	3.6	0.9	3.6	0.5	3.8	1.0
	私は課せられた役割をよく果たしている	3.8	0.6	4.0	0.7	3.8	0.6	4.0	0.8
	努力した結果報われたと感じることがある	4.0	0.6	3.8	0.4	4.0	0.4	3.8	1.0
人生享楽	私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいる	2.4	0.8	**3.8	0.4	2.8	1.1	3.0	0.8
	私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよく持っている	3.2	0.6	*4.0	0.7	3.3	0.7	3.8	1.0
	世界がバラ色に輝いて見えることがある	2.8	1.0	3.0	0.0	2.9	0.9	2.8	0.5
	今日は一日好きなことが出来ると思う日がよくある	3.9	0.7	3.6	0.5	3.8	0.6	4.0	0.8
意欲	自分の人生に大きな期待を持っている	3.3	0.8	3.0	0.7	3.0	0.7	*3.8	0.5
	私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っている	4.2	0.6	4.0	0.7	4.1	0.7	4.3	0.5
	今や甲斐のあることをしている	*4.1	0.3	3.4	0.5	3.9	0.5	3.8	0.5
	私は現在の自分の能力を精一杯発揮している	3.6	0.5	3.6	0.5	3.6	0.5	3.8	0.5

** $p \leq 0.01$ * $p \leq 0.05$ (t検定)

3) 交流事業前後の生きがい感の比較

16 名について、交流事業前後の生きがい感を比較したところ (Wilcoxon 検定), 「私は今の生活に満足感がある ($p=0.0431$)」「私の毎日は充実している ($p=0.0431$)」の 2 項目で有意な差がみられた (表 16)。

表16 交流事業前後の生きがい感

下位尺度	設問	n=16			
		事業前		事業後	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
現状満足感	私は今の生活に満足感がある*	4.3	0.6	4.6	0.6
	毎日が平和で楽しいと感じている	4.1	0.8	4.3	0.8
	私は今幸せを感じている	4.1	0.7	4.2	0.6
	私の毎日は充実している*	4.0	1.1	4.3	0.7
存在価値	努力した結果報われたと感じることがある	3.9	1.0	3.9	0.6
	私は課せられた役割をよく果たしている	3.9	1.0	3.9	0.5
	私は他人から信頼され頼りにされている	3.8	0.5	3.6	0.5
	私の行為で人に喜んで貰えることがよくある	3.4	0.9	3.6	0.6
人生享楽	今日は一日好きなことが出来ると思う日がよくある	3.9	0.8	3.8	0.7
	私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよく持っている	3.6	0.8	3.4	0.8
	世界がバラ色に輝いて見えることがある	2.7	0.5	2.9	0.6
	私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいる	2.6	0.8	2.8	0.7
意欲	私は現在の自分の能力を精一杯発揮している	3.9	1.2	3.6	1.0
	今やり甲斐のあることをしている	3.8	0.8	3.9	0.7
	私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っている	3.7	0.8	4.1	0.5
	自分の人生に大きな期待を持っている	3.1	0.8	3.2	0.5

* $p \leq 0.05$ (Wilcoxon検定)

また, 下位尺度ごとの平均をみると, 現状満足感が 16.5 ± 2.5 から 17.4 ± 2.0 に変化し, 交流事業前後で有意な差がみられた ($p=0.0304$: t 検定)。また, 有意な差はみられなかったが, 意欲も 14.5 ± 1.8 から 14.8 ± 1.3 に, 人生享楽も 12.8 ± 2.3 から 12.9 ± 2.0 に変化していた (表 17)。

表17 交流事業前後の生きがい感_下位尺度

下位尺度	n=16			
	事業前		事業後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
現状満足感 *	16.5	2.5	17.4	2.0
存在価値	15.1	2.6	15.1	1.5
意欲	14.5	1.8	14.8	1.3
人生享楽	12.8	2.3	12.9	2.0

* $p \leq 0.05$ (t検定)

4. 地域高齢者の若者イメージ

若者イメージについて「20 歳代の若者は〇〇」という設問で 8 項目を聞いたところ、交流事業前と交流事業後で若者イメージの設問全てに回答のあったのは 19 名であった（有効回答率 70.4%）。

表18 交流事業前後の若者イメージ

										n=19	
若者像①「20歳代の若者は、社会に貢献している」					若者像⑤「20歳代の若者は、話やすい」						
	事業前		事業後			事業前		事業後			
	人数	割合	人数	割合		人数	割合	人数	割合		
非常にそう思う	1	5.3%	3	15.8%	非常にそう思う	0	0.0%	3	15.8%		
ややそう思う	6	31.6%	6	31.6%	ややそう思う	3	15.8%	7	36.8%		
どちらとも言えない	10	52.6%	10	52.6%	どちらとも言えない	11	57.9%	9	47.4%		
あまりそう思わない	2	10.5%	0	0.0%	あまりそう思わない	5	26.3%	0	0.0%		
全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%	全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%		
p=0.9375(Wilcoxon検定)					p=0.0015(Wilcoxon検定)						
若者像②「20歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている」					若者像⑥「20歳代の若者は、きちんとしている」						
	事業前		事業後			事業前		事業後			
	人数	割合	人数	割合		人数	割合	人数	割合		
非常にそう思う	6	31.6%	1	5.3%	非常にそう思う	0	0.0%	2	10.5%		
ややそう思う	9	47.4%	11	57.9%	ややそう思う	4	21.1%	7	36.8%		
どちらとも言えない	3	15.8%	5	26.3%	どちらとも言えない	11	57.9%	9	47.4%		
あまりそう思わない	1	5.3%	1	5.3%	あまりそう思わない	4	21.1%	1	5.3%		
全くそう思わない	0	0.0%	1	5.3%	全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%		
p=0.0117(Wilcoxon検定)					p=0.0329(Wilcoxon検定)						
若者像③「20歳代の若者は、これからの活躍が期待できる」					若者像⑦「20歳代の若者は、あたたかい」						
	事業前		事業後			事業前		事業後			
	人数	割合	人数	割合		人数	割合	人数	割合		
非常にそう思う	5	26.3%	11	57.9%	非常にそう思う	1	1.3%	4	21.1%		
ややそう思う	7	36.8%	4	21.1%	ややそう思う	2	2.5%	4	21.1%		
どちらとも言えない	6	31.6%	4	21.1%	どちらとも言えない	12	15.2%	11	57.9%		
あまりそう思わない	1	5.3%	0	0.0%	あまりそう思わない	4	5.1%	0	0.0%		
全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%	全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%		
p=0.0191(Wilcoxon検定)					p=0.0033(Wilcoxon検定)						
若者像④「20歳代の若者は、何を考えているのかわからない」					若者像⑧「20歳代の若者は、強い」						
	事業前		事業後			事業前		事業後			
	人数	割合	人数	割合		人数	割合	人数	割合		
非常にそう思う	4	21.1%	1	5.3%	非常にそう思う	0	0.0%	2	10.5%		
ややそう思う	3	15.8%	6	31.6%	ややそう思う	3	15.8%	5	26.3%		
どちらとも言えない	8	42.1%	7	36.8%	どちらとも言えない	11	57.9%	9	47.4%		
あまりそう思わない	4	21.1%	4	21.1%	あまりそう思わない	5	26.3%	3	15.8%		
全くそう思わない	0	0.0%	1	5.3%	全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%		
p=0.3066(Wilcoxon検定)					p=0.0330(Wilcoxon検定)						

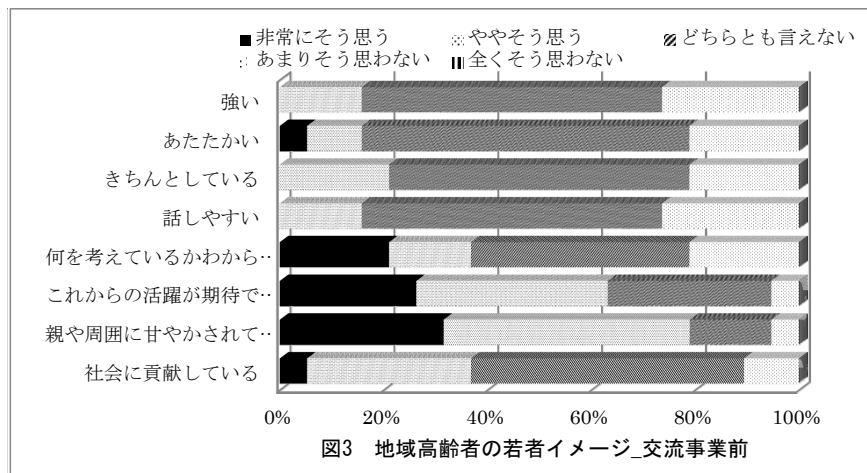
1) 交流事業前の若者イメージ

19 名の交流事業前の地域高齢者の若者イメージで、「非常にそう思う」の割合は、「20 歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている（31.6%）」、「20 歳代の若者は、これからの活躍が期待できる（26.3%）」、「20 歳代の若者は、何を考えているかわからない（21.1%）」の順で多かった。一方、「あまりそう思わない」の割合は、「20 歳代の若者は、話しやすい（26.3%）」、

「20 歳代の若者は、強い (26.3%)」, 「20 歳代の若者は、きちんとしている (21.1%)」の順で多かった。なお、8 項目全てで「全くそう思わない」はなかった (表 18・図 3)。

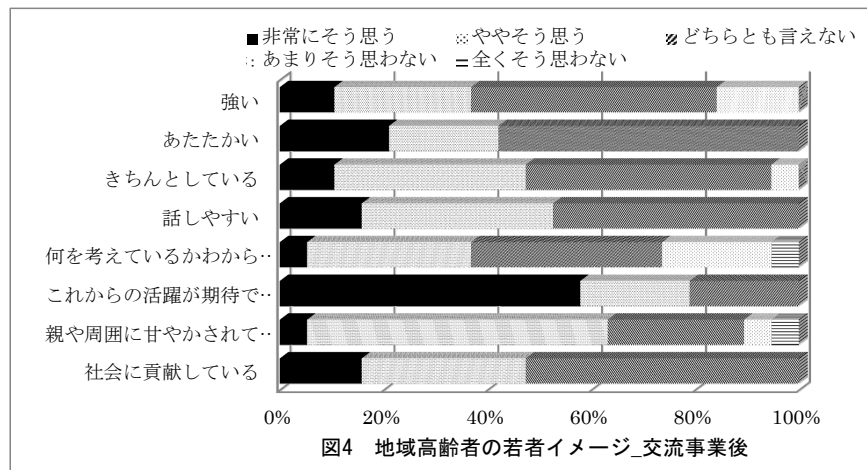
交流事業前の若者のイメージを、若者と話す機会、性別、年齢で比較したが、いずれも有意な差はみられなかった

(Mann-Whitney 検定)。



2) 交流事業後の若者イメージ

19 名の交流事業後の地域高齢者の若者イメージで、「非常にそう思う」の割合は、「20 歳代の若者は、これからの活躍が期待できる (57.9%)」, 「20 歳代の若者は、あたたかい (21.1%)」,



「20 歳代の若者は、社会に貢献している (15.8%)」の順で多かった。一方、「あまりそう思わない」の割合は、「20 歳代の若者は、何を考えているかわからない (21.1%)」, 「20 歳代の若者は、強い (15.8%)」, 「20 歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている (5.3%)」で、「20 歳代の若者は、何を考えているかわからない」と「20 歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている」では、5.3%が「全くそう思わない」と回答していた (表 18・図 4)。

交流事業後の若者のイメージを、若者と話す機会、性別、年齢で比較したが、いずれも有意な差はみられなかった (Mann-Whitney 検定)。

3) 交流事業前後の若者イメージの比較

19 名について、交流事業前後の若者イメージを比較したところ (Wilcoxon 検定), 「話しやすい (p=0.0015)」 「あたたかい (p=0.0033)」 「これからの活躍が期待できる (p=0.0191)」 「きちんとしている (p=0.0329)」 「強い (p=0.0330)」 の 5 項目で有意な差がみられた。

5. 交流事業後、若者（看護学生）に対して感じたこと

交流事業後に「若者（看護学生）に対して感じたこと」を自由記載で質問した。得られたデータを内容が一文一義であるよう記述を区切り1記録単位とし、さらに内容の類似性により帰納的に分類した。その結果、『明るく若い学生と話すのはいい』『将来の看護師へ期待・希望を感じた』『目標達成に向けて充実した学業生活を送っている』の3つの最終的なカテゴリを得た。以下『 』を最終的なカテゴリ、「 」を第2段階のカテゴリ、（ ）内は記録単位を示す。

『明るく若い学生と話すのはいい (30)』は、「明るく若くていい (15)」「とても純粋で新鮮だ (7)」「よく話を聞いてくれて嬉しかった (8)」の3カテゴリ、『将来の看護師へ期待・希望を感じた (19)』では、「高齢者が望む学生の将来像 (12)」「学生に希望を感じた (7)」の2カテゴリ、『目標達成に向けて充実した学業生活を送っている (8)』では、「目標達成に向けての前向きな努力を感じた (6)」「充実した学生生活をしていると感じた (2)」の2カテゴリから構成されていた。結果の詳細は、表 19 に示したとおりであった。

表19 若者(看護学生)に対して感じたこと

最終的なカテゴリ	第2段階のカテゴリ	第1段階のカテゴリ	記録単位
明るく若い 学生と話す のはいい (30)	明るく若くていい (15)	明るい(6)	明るい
			明るい方たち
			明るい
			明るい
			明るい笑顔
			明るく笑顔(気楽にできたのが良かった)
		学生の若さはいい(5)	きれいな初々しい目を輝かせていた
			若さはいつの世も良い
			生き生き
			希望に満ちていたのが好感がもてた
			表情が生き生きしている
		とても感じがよい(4)	気持ちよく接してくれた
			とても感じの良い
			とても感じが良かった
			嫌味のない態度で気持ちがよい
	とても純粋で 新鮮だ(7)	とても純粋(2)	とても純粋
			純真無垢
		遠慮がち(2)	一寸 おとなしすぎる
			謙虚すぎる位
		新鮮さ(1)	日頃接する対象は同年代人がほとんどなので、 実に新鮮で戸惑いもあった
		温かい(1)	温かい
		素直(1)	素直
	よく話を聞いてく れて嬉しかった(8)	よく話を聞いてくれた (傾聴する姿勢) (5)	とても一生懸命に聞いてくれた
			私の話をよく聞いてくれた
			色々な話を聞いてくれた
			話を良く聞いてくれた
			とても話の聞き上手
		学生のコミュニケーションに 好印象を感じた(3)	1人なので久しぶりにお話ができパワーをもらっ た
			測定後も痛くないですかとか大丈夫ですかと心 配してもらい嬉しかった
			先入観なく接してくれ、質問、応答いづれも好感 がもてた

最終的なカテゴリ	第2段階のカテゴリ	第1段階のカテゴリ	記録単位
将来の看護師へ期待・希望を感じた(19)	高齢者が望む学生の将来像 (12)	多くのことを知り学んでほしい (4)	頑張ってほしい
			楽しんで色々な勉強をしてほしい
			しっかりと勉強して行ってほしい
			大いに勉強してほしい
		こういう看護師になってほしい (3)	時代に合った看護師を目指してほしい
			このまま成長して大勢の人達に笑顔で接してほしい
			将来職場についても、いつも明るく楽しい雰囲気を出してもらいたい
		もっと積極性がほしい (3)	「もっとこんな時はどうしたら良いか」とか、もっと聞いた方が良いかなと感じる
			もっと攻撃的でもよい
			一方的にこちらから話たけれどそれで良かったのかと感じた
		社会貢献をしてほしい(1)	社会に役立つことをしてほしい
		高齢者が望む将来の生き方 (1)	社会人となった時にどんなつらい仕事にでも頑張る欲しい。必ず見返に良い事があるから。
	学生に希望を感じた(7)	将来いい看護師になるだろう (4)	将来、看護の仕事に就いた時に看られる対象者はとても幸せであると実感した
			良い看護師さんになると思う
			近い将来、素晴らしい医療従事者になると予感がした
			とても感じの良く、社会に出てからも良い看護師さんになるだろう
		未来の看護師に自分の役割が果たせたと感じた (2)	私の経験話が役に立てたかなと思う
			将来の希望を持った学生に接し、色々な情報を伝えられたかなと思う
		日本の将来に希望を感じた (1)	日本の未来を託せる
目標達成に向けて充実した学生生活を送っている (8)	目標達成に向けての前向きな努力を感じた (6)	物事に真剣に取り組んでいる (4)	看護学生の一生懸命勉強している姿を感じた
			学生生活もまじめに真剣に取り組んでいる様子がうかがえた
			看護という大変な分野を選択し、とても真剣に取り組んでいる
			とても真剣
		将来の進路を見定めている様子が分かり頼もしい(1)	将来の進路を見定めている様子が分かり(我々の世代が経験していない)頼もしい
		レベルの高さを感じた(1)	本当にレベルの高さを感じた
	充実した学生生活をしていると感じた(2)	充実した学生生活をしていると感じた(2)	楽しく学生生活をしている感があり微笑ましい 今の学生生活は私の時代より優雅

6. 交流事業に対する意見・質問

交流事業前に本事業に対する意見を自由記載で質問した。得られたデータを内容が一文一義であるよう記述を区切り 1 記録単位とした結果を以下に示した。

1) 将来の看護師(学生)への願い

- ・ 目標に向かって頑張ってもらいたい。
- ・ 今日、先輩（人生）面して、実用学（専攻科目）以外に教養を身につけ、無駄なことのよ
うに思っても学んで行って欲しい。
- ・ 健康に留意し勉強してほしい
- ・ 4人の学生達がそれぞれ良い個性を持ち、優しさのある娘たちで2年後の活躍が楽しみ。
こんな娘たちがいる両親が羨ましい。きっとよい家庭で育ったのでしょう・・・。
- ・ なるべく山梨学内で働いてほしい。
- ・ 参加された学生さんについては非常に素晴らしい。このままの良さを将来に生かして
ほしい。
- ・ 看護師は激務なので楽な職場を選んだ方が本人の為に良い。看護師は寿命が最も短い。
職場では体がえらい時は違う職場へ行った方が良い。

2) 交流事業というよい機会だった(高齢者自身に得たものがあった)

- ・ まあまあ健康である事に感謝し、現状維持を長続きする様にと深く思った。
- ・ ここでの「20 歳代の若者」は社会一般。今日接した方は対象外だった。素晴らしい体験
でした。認識を新たにしました。
- ・ 初めての参加だが、自分の生き方に活躍を見出せてありがたく思った。
- ・ 大変学ばせてもらった。
- ・ 20 歳代の若者と接する機会がほとんどないので、今回は良いチャンスをもたらした。
- ・ 一方的な会話になったが、とても良い経験をした。
- ・ 自分の考え方や希望が伝える（少々）良い機会であった。

3) 学生とのコミュニケーションは、とても楽しいひとときだった

- ・ 初めて参加し、楽しい時間を過ごした。
- ・ 明るい表情で聞いてくれて感謝している。
- ・ 最初はどんな難しい事をするのかと少し不安だったが、参加したら楽しくてあっとい
う間に時間が過ぎた。若い人達と話す機会があまりないので、調子に乗って一人でしゃ
べりすぎてしまったかもしれません。
- ・ 初めて参加したが、我々にとっても非常に楽しいと感じた人々が多いと思う。
- ・ 20 歳代の方と話できて良かった。

4) 今後このような機会があれば参加したい

- ・ 又こういう機会があればと思います。
- ・ 楽しくて又こんな機会があれば喜んで参加したい。
- ・ またあれば参加したい。
- ・ 将来の看護師さんが立派（一人前）になる手助けをできたか不安だが又機会があれば参加したい。
- ・ この様な交流があれば次回も参加したい。

5) 事業への意見・評価

- ・ 話の間に多く質問をしてほしい。
- ・ 他の自治会との交流をしたい。
- ・ 経過観察的機会を含んだ「交流方法」も取り入れられてはどうか。
- ・ 地域にあって情報発信機能といった役割を担っていただいております安心感,信頼感,そして感謝している。
- ・ 20代の若者についての感じ方は,看護学生を見ればNO.2を除いて全て5ないし4に当てはまるが全体像の印象は難しい（アンケートに対する意見）。

6) 今後の事業継続を希望する

- ・ 今後大変だが,この様な機会を多く作ってほしい。
- ・ この様な機会は今後も得たいと考えた。
- ・ 今後大勢の人達がこういう機会をもてたら良いと思った。
- ・ 今後共,交流をよろしくお願いします。

7) 学生からエネルギーをもらった

- ・ 年齢を重ねると何の役にも立たないと思ったが,若い方とふれあう事は素晴らしいエネルギーをもらえ,あと少し人生を前向きに明るく過ごせたら幸せと思った。
- ・ 若い人達との交流で,若いエネルギーをもらい笑顔に接しありがとうございました。

VII. まとめ

本交流事業は、これまで 5 年間行ってきた成果を基盤に、今年度は大学周辺地域に在住する高齢者に、看護学生が授業の一環として行う学内演習に看護の対象者役として参加・協力するという内容で実施した。

対象者は、学生とたくさん話して世代間の相互理解を深めたいと考えて期待して事業に参加し、期待以上の満足感を得ていた。高齢者と若者の世代間交流においては、相互の理解を深めることに加え、高齢者が年長者としての役割意識を持って臨める企画が必要であるが¹⁹⁾、対象者の 1/4 以上が学生の学びをサポートしたいと回答していた。本交流事業が居住地域内にある大学の学生の授業に協力という企画であったため、高齢者は身近なところで目的意識を持って学修する若者をサポートするという役割意識を抱いて交流することができ、高い満足度に繋がったものと推察される。

本交流事業終了後にも、参加した高齢者から「とても楽しい企画で有意義な時間だった。次の機会があればまた参加したいし、もっと多くの人が参加できるよう地域全体に声をかけてほしい」という意見もいただいた。また有意な差はなかったものの、社会貢献に対する意識は交流事業後に高くなっている傾向にあり、本企画は高齢者が今後も引き受けたいと考える内容であったと言える。

本交流事業により、若者世代へ的高齢者の役割認識および社会貢献に対する意識の活性化という効果が示唆され、また身近だが話す機会は少ない若者と接し、高齢者が楽しみや達成感を実感できるような企画の継続は、地域高齢者のより生き生きした生活に寄与することが期待できると考える。今後も引き続き本交流事業を継続して実施するとともに、場面や交流相手を様々なライフステージにある人々に広げて、高齢者世代との相互交流を企画・実施していくことが課題である。

謝辞

本研究実施にあたり、多大なご協力をいただきました A 自治会の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 草野篤子：インタージェネレーションの必要性，5-8，現代のエスプリ第444号，至文堂，2004. 7.
- 2) 甲斐一郎：ソーシャル・サポート授受の介入研究（世代間交流が高齢者と高校生に与える影響）（研究課題番号10670338），平成10～12年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書，2002.
- 3) 岩佐一，権藤恭之，増井幸恵他：地域在宅超高齢者における廃用症候群の予防を目指した訪問型介入プログラム「自分史くらぶ」の開発予備的検討，老年社会科学29巻1号，75-83，2007. 4.
- 4) 藤原佳典，西真理子，渡辺直紀他：都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果，日本公衆衛生雑誌 53 巻 9 号，702-714，2006. 9.
- 5) 新田淳子，緒方泰子：世代間交流プログラムに長期間参加した小学生の高齢者観 介護老人福祉施設との継続的な交流のもたらす意義，日本看護福祉学会誌10巻1号，90-91，2004. 6.
- 6) 渡辺直紀，藤原佳典，西真理子他：都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”（4）児童の高齢者イメージ，老年社会科学27巻2号，273，2005. 6.
- 7) 伊藤光代，尾崎沙和子，山口文芳：「高齢者理解」への実践的なアプローチ-「行動の変容とレベルアップのピラミッド」の手法による学生の高齢者像の変容-，高知女子大学看護学会誌 Vol. 31 No. 1 ， 65-71 ， 2006. 6.
- 8) 勝眞久美子：自律した高齢者との語り合いが看護学生にもたらす効果，日本看護学会論文集 老年看護 Vol. 37，172-174 ， 2007. 2.
- 9) 流石ゆり子，亀山直子：『健康高齢者実習』の意義－学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討－日本老年看護学会誌，Vol. 9 No. 1 ， 65-75 ， 2004. 11.
- 10) 渡邊裕子，倉田トシ子，森田祐代：看護学生の高齢者イメージに関する研究－老年看護学講義開始前から老年看護学臨地実習Ⅱ終了までの変化－，山梨県立看護大学短期大学部紀要 Vol. 11 No. 1 ， 159-166 ， 2006. 3.
- 11) 藤巻尚美，流石ゆり子，牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果-高齢者に対する年齢と色のイメージ変化より-，山梨県立大学看護学部紀要 Vol. 9，35-42 ， 2007. 3.
- 12) 藤巻尚美，流石ゆり子，牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果(第2報)－高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて－，山梨県立大学看護学部紀要 Vol. 10 ， 93-101 ， 2008. 3.
- 13) 渡邊裕子，倉田トシ子，森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ，日本看護科学学会学術集会講演集Vol. 24，322 ， 2004. 12.
- 14) 家里かおり，渡邊裕子，倉田トシ子他：同居祖父母の健康状態が看護学生の高齢者イメージに及ぼす影響，日本看護学会論文集 老年看護Vol. 35，82-84 ， 2005. 1.

- 15) 渡邊裕子, 小山尚美, 流石ゆり子他: 看護学生との交流による地域リーダー高齢者の活動への満足度・心理・若者像の変化-「交流事業」参加前・後の比較から-, 平成 21 年度山梨県立大学看護学部共同研究費助成研究成果報告書, 2010. 3.
- 16) 流石ゆり子, 渡邊裕子, 小山尚美他: 看護学生との交流による地域リーダー高齢者の活動への満足度・心理・若者像の変化-「異世代間交流事業」参加前・後の比較から- (Part II), 山梨県立大学地域研究交流センター2010 年度研究報告書, 2011. 3.
- 17) 堀洋道監修/吉田富二雄編: 心理測定尺度集Ⅱ, 412-416, サイエンス社, 2002. 6.
- 18) 前掲 2), 3-4.
- 19) 渡邊裕子, 森田祐代, 小山尚美他: 地域リーダー高齢者と若者の世代間交流事業の企画における課題-看護学生との交流事業への参加動機・期待度・満足度の分析より-, 日本老年看護学会第 16 回学術集会抄録集, 226, 2011. 6.

付録・資料

1. 研究協力依頼文書
2. 研究協力同意書
3. 研究協力内容説明文書
4. 交流前調査票
5. 交流後調査票
6. 交流事業当日の写真

〇〇自治会 会員各位

『若者（看護学生）との交流に関する研究』への協力について（お願い）

梅雨明けの待たれる今日この頃、皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、〇〇自治会の皆様におかれましては、平素より本学の教育に多大なご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、現在の少子高齢化を反映して、全国各地で徐々に世代間交流事業が実施されるようになっております。そのような中、我々は「看護学生が大学内で行う演習に対象者役としてご協力いただく」形で大学のある〇〇自治会の方々と若者（看護学生）との交流を企画いたしました。人生の先輩である皆様に、将来看護職を目指す学生の授業にご参加いただき、若者に知恵を伝授していただくと共に、相互理解・交流の機会としたいと考えました。また交流の前後に簡単なアンケートにご協力いただき、皆様の活動への満足度や学生に対するイメージの変化などについてうかがい、本企画の評価とともに、今後皆様と本学の学生が地域の中でのさらに活発に交流できる機会のあり方について検討していきたいと考えております。

授業にご協力いただく内容について簡単に説明させていただきます。皆様には、本学の学生の授業に看護の対象者役としてご協力いただきながら、看護学生との交流を深めていただきたいと考えております。事前に皆様から健康に関する簡単な情報をご提供いただき、看護の視点からその情報の意味や、皆様の健康の保持増進を目指す時、他にどのような情報が必要か等について、学生 2～3 名が 1 グループで考えます。当日は事前に学習したことを基に、皆様から直接お話をうかがい、血圧等の測定をさせていただきながら、さらに理解を深めて必要な看護について考えていきたいと思っております。

なお、ご協力につきましては、貴自治会および個人のお名前が特定できないようにするとともに、いただいた情報の管理は厳重に行い、授業および研究の目的以外には使用いたしません。また、一度提供していただいた内容でも、途中で協力を撤回することもできます。また地域での生活に不利益にならないよう十分配慮いたします。ご多忙中誠に恐縮ですが、趣旨をご理解いただき、是非ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

なお、本企画にご協力いただける方は、別紙の同意書にご記入の上、添付の封筒にお入れいただき（厳封）、平成 23 年〇月〇日（〇）までに各組長様ご提出いただけますようお願い申し上げます。ご協力いただける方（協力をご検討いただける方）には、後日あらためてお願いと企画の詳細についての説明をさせていただきます。何卒よろしくお願い申し上げます。

研究代表者	渡邊 裕子	（山梨県立大学 看護学部 老年看護学）
研究分担者	流石 ゆり子	（同上）
	森田 祐代	（同上）
	水口 哲	（山梨県中北教育事務所）
	依田 良文	（同上）
	小山 尚美	（同上）
	萩原 理恵子	（同上）

なお、本研究に関する問い合わせは下記までお願い致します。

【問い合わせ先】 山梨県立大学 看護学部 老年看護学

渡邊 裕子

電話・FAX：055-253-9904（直通）

資料 2 研究協力同意書

『若者（看護学生）との交流に関する研究』協力 同意書

『若者（看護学生）との交流に関する研究』への協力依頼についての文書を読み、目的、内容、個人情報の守秘等について理解しました。

そこで、私の自由意思に基づいてこの研究に協力することに同意します。

平成 23 年 月 日

氏名（ふりがな）：_____

年齢：_____ 歳

住所：_____

電話番号：_____

〇〇自治会 会員各位

『若者（看護学生）との交流に関する研究』と授業への協力について（お願い）

盛夏の候、皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。この度は、『若者（看護学生）との交流に関する研究』と授業への協力説明会に、ご参加いただき深く感謝申し上げます。

さて、現在の少子高齢化を反映して、全国各地で徐々に世代間交流事業が実施されるようになっております。そのような中、我々は「看護学生が大学内で行う演習に対象者役としてご協力いただく」形で大学のある〇〇自治会の方々と若者（看護学生）との交流を企画いたしました。人生の先輩である皆様に、将来看護職を目指す学生の授業にご協力いただきながら、若者に知恵を伝授していただくと共に、相互理解・交流の機会としたいと考えました。また交流の前後に簡単なアンケートにご協力いただき、皆様の活動への満足度や学生に対するイメージの変化などについてうかがい、本企画の評価とともに、今後皆様と本学の学生が地域の中でのさらに活発に交流できる機会のあり方について検討していきたいと考えております。

授業にご協力いただく内容について簡単に説明させていただきます。皆様には、本学の学生の授業に看護の対象者役としてご協力いただきながら、看護学生との交流を深めていただきたと考えております。事前に皆様から健康に関する簡単な情報をご提供いただき、看護の視点からその情報の意味や、皆様の健康の保持増進を目指す時、他にどのような情報が必要か等について、学生3～4名が1グループで考えます。当日は事前に学習したことを基に、皆様から直接お話をうかがい、血圧等の測定をさせていただきながら、さらに理解を深めて必要な看護について考えていきたいと思っております。

なお、ご協力につきましては、皆様の自由意思を尊重いたします。また、貴自治会および個人のお名前が特定できないようにするとともに、いただいた情報の管理は厳重に行い、授業および研究の目的以外には使用いたしません。また、一度提供していただいた内容でも、途中で協力を撤回することもできます。また地域での生活に不利益にならないよう十分配慮いたします。ご多忙中誠に恐縮ですが、趣旨をご理解いただき、是非ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

研究代表者	渡邊 裕子	（山梨県立大学 看護学部 老年看護学）
研究分担者	流石 ゆり子	（同上）
	小山 尚美	（同上）
	森田 祐代	（同上）
	萩原 理恵子	（同上）
	水口 哲	（山梨県中北教育事務所）
	依田 良文	（同上）

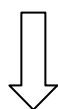
なお、本研究及び授業に関するお問い合わせは下記までお願い致します。

【問い合わせ先】 山梨県立大学 看護学部 老年看護学 渡邊 裕子
電話・FAX：055-253-9904（直通）

「若者（看護学生）との交流前」調査用紙

今回の研究協力に関して、以下のどちらかに○をつけて下さい。

同意して協力する



同意せず協力をしない



このままご返却下さい。ありがとうございました。

同意される方は、先にお進み下さい。

☆ 回答には、「該当するものに○をつけていただくもの」と「自由に記述していただくもの」があります。

I まず、あなたご自身についてうかがいます。当てはまる番号に○をつけるか、
（ ）に記入して下さい。

1) 年齢は；（ ） 歳

2) 性別は； 1. 男性 2. 女性

3) 家族構成は；同居しているすべての方に○をつけて下さい。

父・母・義父・義母・配偶者・息子・娘・嫁・婿・孫（ 人）

その他（ ）

4) 18 歳～30 歳以下の若者と話しをする機会がありますか？

1. ある 2. ときどきある 3. ほとんどない

5) 4)で「1. ある」「2. ときどきある」と答えた方にうかがいます。

どなたと、どれくらいの頻度で、何分くらい話しますか。

最も話す若者ひとりを思い浮かべてお答え下さい。

(1) 誰と？； 1. 同居の孫 2. 別居の孫 3. 近所の若者 4. その他（ ）

(2) 頻度？； 1. 毎日 2. 週1回程度 3. 月1回程度 4. その他（ ）

(3) 何分？； 1. 挨拶程度 2. 30分以内 3. 60分以内 4. 1時間以上

(4) 差し支えなければ、どのようなことを話すのかを簡単にお聞かせ下さい。

【内容】

資料 4. 交流前調査票

Ⅱ 「若者（看護学生）との交流」についてうかがいます。

- 1) この交流への参加動機として当てはまるものすべてに○をつけて下さい。
1. 「看護学生との交流」参加経験者の話を聴いて面白そうだから
 2. 若者と話すことが好きだから
 3. 看護学生の学びに興味があったから
 4. 若者に年長者としての知恵を伝授したいから
 5. 若者と話す機会が少ないから
 6. その他（ ）
- 2) この交流への期待度を教えて下さい。当てはまるもの一つに○をつけて下さい。
1. とても期待している
 2. 期待している
 3. あまり期待していない
 4. まったく期待はしていない
- 3) この交流にあなたが期待することはどんなことですか。当てはまるものすべてに○をつけて下さい。
1. 看護学生の話がたくさん聞きたい
 2. 自分が看護学生にたくさん話しをしたい
 3. 看護学生の学びをサポート（手助け）したい
 4. 現代の看護学生を理解したい
 5. 看護学生に自分たちの世代を理解してほしい
 6. その他（ ）

Ⅲ 次のような活動を、現在どれくらいされていますか。

当てはまるもの一つに○をつけて下さい。

- 1) 地域の行事（お祭り・盆踊りなど）への参加
1. していない
 2. ときどきしている
 3. いつもしている
- 2) 町内会や自治会活動
1. していない
 2. ときどきしている
 3. いつもしている
- 3) 老人会（老人クラブ）活動
1. していない
 2. ときどきしている
 3. いつもしている
- 4) 趣味の会など、仲間うちの活動
1. していない
 2. ときどきしている
 3. いつもしている
- 5) 奉仕活動・ボランティア活動
1. していない
 2. ときどきしている
 3. いつもしている

資料 4_交流前調査票

Ⅳ 「生活の中での満足感・やる気」についてうかがいます。

以下の 16 項目のすべてについて、最も当てはまる番号一つに○をつけて下さい。

No	項目	当てはまる	まあまあ当てはまる	どちらとも言えない	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	私は今の生活に満足感があります	5	4	3	2	1
2	私は他人から信頼され頼りにされています	5	4	3	2	1
3	毎日が平和で楽しいと感じています	5	4	3	2	1
4	私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいます	5	4	3	2	1
5	私の行為で人に喜んで貰えることがよくあります	5	4	3	2	1
6	自分の人生に大きな期待を持っています	5	4	3	2	1
7	私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよく持っています	5	4	3	2	1
8	私の毎日は充実していると思います	5	4	3	2	1
9	私は今幸せを感じています	5	4	3	2	1
10	世界がバラ色に輝いて見えることがあります	5	4	3	2	1
11	私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っています	5	4	3	2	1
12	今日は一日好きなことが出来ると思う日がよくあります	5	4	3	2	1
13	今やり甲斐のあることをしています	5	4	3	2	1
14	私は課せられた役割をよく果たしています	5	4	3	2	1
15	私は現在の自分の能力を精一杯発揮しています	5	4	3	2	1
16	努力した結果報われたと感じることがあります	5	4	3	2	1

資料 4_交流前調査票

V 皆様が日頃、若者に対してお持ちのイメージについてうかがいます。以下の 8 項目のすべてについて、最も当てはまる番号一つに○をつけて下さい。

No	項目	非常に そう思う	やや そう思う	どちら とも言 えない	あまり そう思 わない	全く そう思 わない
1	20 歳代の若者は、社会に貢献している	5	4	3	2	1
2	20 歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている	5	4	3	2	1
3	20 歳代の若者は、これからの活躍が期待できる	5	4	3	2	1
4	20 歳代の若者は、何を考えているのかわからない	5	4	3	2	1
5	20 歳代の若者は、話しやすい	5	4	3	2	1
6	20 歳代の若者は、きちんとしている	5	4	3	2	1
7	20 歳代の若者は、あたたかい	5	4	3	2	1
8	20 歳代の若者は、強い	5	4	3	2	1

VII この交流に関してご意見・ご質問等がございましたら、ご自由にお書き下さい。

質問は以上です。ご協力、まことにありがとうございました。

「若者（看護学生）との交流後」調査用紙

☆ 回答には、「該当するものに○をつけていただくもの」と「自由に記述していただくもの」があります。

I 「若者（看護学生）との交流」についてうかがいます。

あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

- 1) この交流の満足度を教えてください。
 1. まったく満足できなかった
 2. 期待していたより満足度は低かった
 3. 期待していたとおりの満足度であった
 4. 期待以上の満足度であった

- 2) 今日交流した若者（看護学生）は真剣にお話を聞いていましたか。
 1. まったく聞いていなかった
 2. あまり聞いていなかった
 3. どちらともいえない
 4. まあまあ聞いていた
 5. とてもよく聞いていた

- 3) ご自分のお話が若者（看護学生）に十分理解されたと思いましたか。
 1. まったく理解されていなかったと思う
 2. あまり理解されていなかったと思う
 3. どちらともいえない
 4. まあまあ理解されていたと思う
 5. とてもよく理解されていたと思う

- 4) 若者（看護学生）に対して感じたことをご自由にお書き下さい。

Ⅱ 次のような活動に今後どれくらい参加しようと思っていますか。
あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

- 1) 地域の行事（お祭り・盆踊りなど）への参加
1. 参加しない 2. ときどき参加する 3. いつも参加する
- 2) 町内会や自治会活動
1. 参加しない 2. ときどき参加する 3. いつも参加する
- 3) 老人会（老人クラブ）活動
1. 参加しない 2. ときどき参加する 3. いつも参加する
- 4) 趣味の会など，仲間うちの活動
1. 参加しない 2. ときどき参加する 3. いつも参加する
- 5) 奉仕活動・ボランティア活動
1. 参加しない 2. ときどき参加する 3. いつも参加する

Ⅲ 次のような活動の依頼が今後あったとしたら，あなたは引き受けると思いますか。
あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

- 1) 近所の小学校に出向いて，小学生に自分の経験を話す。
1. 引き受けない 2. どちらとも言えない 3. 引き受ける
- 2) 大学で看護学部の授業に参加し，看護学生に自分の経験を話す。
1. 引き受けない 2. どちらとも言えない 3. 引き受ける
- 3) 大学で看護学部の授業に参加し，看護学生が血圧や脈拍の測定をすることに協力する。
1. 引き受けない 2. どちらとも言えない 3. 引き受ける

Ⅳ 「生活の中での満足感・やる気」についてうかがいます。

以下の 16 項目のすべてについて、最も当てはまる番号一つに○をつけて下さい。

No	項目	当 て は ま る	ま あ ま あ 当 て は ま る	ど ち ら と も 言 え な い	あ ま り 当 て は ま ら な い	当 て は ま ら な い
1	私は今の生活に満足感があります	5	4	3	2	1
2	私は他人から信頼され頼りにされています	5	4	3	2	1
3	毎日が平和で楽しいと感じています	5	4	3	2	1
4	私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいます	5	4	3	2	1
5	私の行為で人に喜んで貰えることがよくあります	5	4	3	2	1
6	自分の人生に大きな期待を持っています	5	4	3	2	1
7	私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよく持っています	5	4	3	2	1
8	私の毎日は充実していると思います	5	4	3	2	1
9	私は今幸せを感じています	5	4	3	2	1
10	世界がバラ色に輝いて見えることがあります	5	4	3	2	1
11	私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っています	5	4	3	2	1
12	今日は一日好きなことが出来ると思う日がよくあります	5	4	3	2	1
13	今やり甲斐のあることをしています	5	4	3	2	1
14	私は課せられた役割をよく果たしています	5	4	3	2	1
15	私は現在の自分の能力を精一杯発揮しています	5	4	3	2	1
16	努力した結果報われたと感じることがあります	5	4	3	2	1

資料 5_交流後調査票

V 皆様が日頃、若者に対してお持ちのイメージについてうかがいます。以下の 8 項目のすべてについて、最も当てはまる番号一つに○をつけて下さい。

No	項目	非常に そう 思う	やや そう 思う	どちら とも言 えない	あまり そう 思わ ない	全く そう 思わ ない
1	20 歳代の若者は、社会に貢献している	5	4	3	2	1
2	20 歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている	5	4	3	2	1
3	20 歳代の若者は、これからの活躍が期待できる	5	4	3	2	1
4	20 歳代の若者は、何を考えているのかわからない	5	4	3	2	1
5	20 歳代の若者は、話しやすい	5	4	3	2	1
6	20 歳代の若者は、きちんとしている	5	4	3	2	1
7	20 歳代の若者は、あたたかい	5	4	3	2	1
8	20 歳代の若者は、強い	5	4	3	2	1

VI この交流に関してご意見・ご質問等がございましたら、ご自由にお書き下さい。

質問は以上です。ご協力、まことにありがとうございました。

資料 6 交流事業当日の写真



資料 6 交流事業当日の写真



